『西南アジア研究』No. 68, 2008

サンスクリットの異語幹名詞 akṣi-について

高　橋　淳　一

は　じ　め　に

古代インドに於いて用いられた言語であるサンスクリットの i-語幹名詞には，不規則な曲用を示すものが幾種類か存在する。なかでも興味深いのは akṣi-「目」を代表とする，語幹が i と n とで交替する異語幹名詞である。語幹が i-/n-で交替する異語幹名詞は印欧語族の他の言語を見渡しても非常に珍しく，実際サンスクリットに於いても akṣi-「目」，asthi-「骨」，dadhi-「凝乳」，sakthi-「腿」という 4 つの中性名詞のみである。以下に akṣi-の古典サンスクリット期のパラダイムを，また比較のため，i-語幹中性名詞及び n-語幹中性名詞の一般的なパラダイムを挙げる[1)]。

表 1 及び 2 から解るように，akṣi-/akṣaṇ-は強語幹（及び中語幹[2)]）では i-語幹中性名詞の形を，弱語幹では n-語幹中性名詞の形をとる（vāri-，nāman-のそれぞれ太字で表した格）。この現象については akṣi-のパラダイムが defective であるため n-語幹 akṣaṇ-のパラダイムから補充された，とするのが一般的な説明である［Whitney 1896 : 122 ; 辻 1974 : 57 等］。

表 1　akṣi/akṣaṇ- n.「目」

	sg.	du.	pl.
N.	akṣi	akṣiṇī	akṣīṇi
V.	akṣe/akṣi	akṣiṇī	akṣīṇi
A.	akṣi	akṣiṇī	akṣīṇi
I.	akṣṇā	akṣibhyām	akṣibhis
D.	akṣṇe	akṣibhyām	akṣibhyas
Ab.	akṣṇas	akṣibhyām	akṣibhyas
G.	akṣṇas	akṣṇos	akṣṇām
L.	akṣaṇi/akṣṇi	akṣṇos	akṣiṣu

1）略号一覧は論文末に付した。

2）サンスクリットの多語幹名詞には 2 語幹名詞と 3 語幹名詞がある。
2 語幹名詞は強語幹（男性は sg. N., V., A., du. N., V., A., pl. N., V., 中性はこれに加えて pl. A. が強語幹）と弱語幹（それ以外）に分かれ，一方 3 語幹名詞は強語幹（2 語幹に同じ），中語幹（du. I., D., Ab., pl. I., D., Ab., L.），弱語幹（それ以外）に分かれる。表 2 に挙げた nāman-に代表される n-語幹（an-語幹）は 3 語幹名詞である。

表2 vāri-n.「水」 nāman- n.「名前」

	sg.	du.	pl.	sg.	du.	pl.
N.	**vāri**	**vāriṇī**	**vārīṇi**	nāma	nāmānī/mnī	nāmāni
V.	**vāri/-āre**	**vāriṇī**	**vārīṇi**	nāma/man	nāmānī/mnī	nāmāni
A.	**vāri**	**vāriṇī**	**vārīṇi**	nāma	nāmānī/mnī	nāmāni
I.	vāriṇā	**vāribhyām**	**vāribhis**	**nāmnā**	nāmabhyām	nāmabhis
D.	vāriṇe	**vāribhyām**	**vāribhyas**	**nāmne**	nāmabhyām	nāmabhyas
Ab.	vāriṇas	**vāribhyām**	**vāribhyas**	**nāmnas**	nāmabhyām	nāmabhyas
G.	vāriṇas	vāriṇos	vāriṇām	**nāmnas**	**nāmnos**	**nāmnām**
L.	vāriṇas	vāriṇos	**vāriṣu**	**nāmani/mni**	**nāmnos**	nāmasu

しかしこの akṣi-/akṣaṇ-について，サンスクリットの最古層Ṛg-Veda に見られる形[3]を古典期のパラダイムと比較すると興味深いことがわかる。表3はṚg-Veda に記録される ákṣi-/akṣáṇ-の語形である。括弧内の数字は使われた回数を示し，Ṛg-Veda では使用例がない形については該当欄にダッシュを施している[4]。また，参考として表4に Vedic の i-語幹名詞と n-語幹名詞のパラダイムを挙げる（古典サンスクリットとの違いを明瞭にするため，古典サンスクリットと同様 i-語幹名詞は強形と中形を，n-語幹名詞は弱形を太字とした）。

表1，3及び4から ákṣi-/akṣáṇ-について，Ṛg-Veda と古典期の間に次のような差異

表3 ákṣi-/akṣáṇ- n.「目」

	sg.	du.	pl.
N.-A.	ákṣi (1)	akṣī́ (6)	akṣā́ṇi (1)
I.	——	——	akṣábhis (19)
D.	——	——	——
Ab.	akṣṇás (1)	akṣī́bhyām (1)	——
G.	——	——	——
L.	——	——	——

表4 súci-[5] n.「輝く」 nā́man- n.「名前」

	sg.	du.	pl.	sg.	du.	pl.
N.-A.	**súci**	**súcī**	**súcī**	nā́ma	nā́manī	nā́māni/-ā/-a
I.	súcinā	**súcibhyām**	**súcibhis**	**nā́mnā**	nā́mabhyām	nā́mabhis
D.	súcaye	**súcibhyām**	**súcibhyas**	**nā́mne**	nā́mabhyām	nā́mabhyas
Ab.	súces	**súcibhyām**	**súcibhyas**	**nā́mnas**	nā́mabhyām	nā́mabhyas
G.	súces	súcyos	súcīnām	**nā́mnas**	**nā́mnos**	**nā́mnām**
L.	súcā/-au	súcyos	**súcṣu**	**nā́mni/-an**	**nā́mnos**	nā́masu

3） Ṛg-Veda をはじめとする古層のサンスクリットを，古典サンスクリットと区別して Vedic あるいは Vedic Sanskrit という。

4） 表3は Lubotsky 1997: II，4－5，Grassmann 1873: 190 のデータをもとに作成したものである。

5） Vedic には i-語幹中性名詞が少ないので，ここでは形容詞 śuci-の中性活用形をあげている。vāri は古典期では i-語幹であるが，Vedic においては r-語幹（vār-）であったため，nāman-のように古典期と直接対応させることができない。また，名詞と形容詞は同一の活用を示す。

が観察される。

	Vedic	: Classical
① 双数奪格形の母音の長さの違い――	akṣíbhyām	: akṣibhyām
② 複数主格対格形の語幹の違い――	akṣā́ṇi	: akṣīṇi
③ 複数具格形の語幹の違い――	akṣā́bhis	: akṣibhis
④ 双数主格形の末尾の違い――	akṣī́	: akṣiṇī

①は語尾直前の母音が Vedic では長母音 ī となっているが，古典サンスクリットでは Vedic の他の i-語幹と同様に短い i であらわれる。②と③では語幹末の母音が古典サンスクリットでは ī と i であるのに対して，Vedic では ā と a であらわれる。更に④は，語尾の形が Vedic では-ī であるのに対し，古典サンスクリットでは-iṇī と著しく異なっている。

そこで本稿ではサンスクリットの i-/n-異語幹名詞 akṣi-に関して，Vedic Sanskrit から古典サンスクリットにかけてどのような変化が起こったのか，また，なぜこのように語幹が i-と n-で交替するパラダイムが Vedic で生まれたのかを探っていく。尚，他の i-/n-異語幹名詞は古い時代の文献における出現頻度が低い点，視点を印欧祖語に向けた際，統一的に扱うには資料が少ない点等を考え，本稿では議論を akṣi-のみに絞ることにする[6)]。

I 先 行 研 究

異語幹名詞 akṣi-を個別に扱った研究は少ないが，サンスクリットの語源を記した Mayrhofer 1986 や印欧語研究の視点を取り入れた詳細なサンスクリット文法書 Debrunner und Wackernagel 1975 が参考となる。本章ではそれぞれが akṣi-/akṣaṇ-についてどの様な説明を与えているかを概観する。

1 Mayrhofer 1986

Mayrhofer 1986: 42－43 は ákṣi-の項で，ákṣi-は akṣáṇ-の語幹と補充的に結びついたと説明し，後のサンスクリットでは語幹が ákṣi-で現れる格が Ṛg-Veda ではこの akṣáṇ-という語幹をとることに言及している。また，この-i-と-an-の広がりから，anákṣ-「盲目の」，akṣ-ī「目（双数主格）」などに見られる，*akṣ-という語幹部を想定している。

Mayrhofer 1986: 42－43 はまた，ákṣi-の祖形については再建が難しいとする。同じインド・イラン語派であるアヴェスタの aš-からは子音部分を *-k̂s-と再建できるが，一方リトアニア語 akìs や古教会スラブ語 oči などの例から *-k̂s-は否定される。しかし，アヴェス

6） サンスクリットでは「目」を表す語彙として akṣi-の他に cakṣu-（アヴェスタではčašman-）があり，akṣi-よりも頻繁に用いられる。

タにおいて本来 *axši という形式があり，uši「耳」からの影響によって *axši ＞ aši という変化が起こったと仮定するならば（注 12 を参照），語根を *h_3ok^w-としてリトアニア語の akìs や古教会スラブ語の oči だけでなく，ラテン語の oculus，ギリシャ語*ὄσσε* とも ákṣi-が同源であると考えられるという。

akṣáṇ-の項では ákṣi-の項に説明を委ね，特に具体的な記述はない。

2 Debrunner und Wackernagel 1975

Debrunner und Wackernagel 1975 は ákṣi-/akṣáṇ-について項目を設けるのではなく，不規則な活用の一つとして i-/n-が混在する語形変化を挙げ，その中で ásthi-/asthán-等とまとめて取り扱っている。Debrunner und Wackernagel 1975 においても，古層のサンスクリットでは i-語幹に比べ，n-語幹が広い範囲を持っていたことについての指摘があり，一方 i-語幹は最初に双数主格・対格，続いて複数，そして-bh-のつく格（双数具格・与格・奪格，複数具格，複数与格・奪格）へと時間を経て広がっていったとある。

3 二つの研究の問題点

どちらの研究も妥当な推測を行っていると言えるかもしれないが，何故 n-語幹が本来は広い分布を示し，i-語幹が双数から広がっていったか，そして Vedic から古典サンスクリットにかけての変遷の理由について十分に解説しているとは言い難い。また，akṣi-/akṣaṇ-の同源語についても仮説を示すに留まり，それを裏付ける分析は示されていない。

Ⅱ 祖語から分派諸言語への変化

akṣi-/akṣaṇ-について考えてゆく際，Vedic と古典サンスクリットの違いだけでなく，印欧祖語の段階でどのような形であったか，また他の印欧語では akṣi-/akṣaṇ-の同源語がどのような振る舞いを見せているかを観察することで，より実態に迫っていくことができる。そこで，Ⅱでは印欧祖語の「目」を表す形式がどのような歴史を辿ったか，またどのような形で Vedic に受け継がれていったかを考察する。

1 語根

印欧祖語の動詞及び名詞は語根をもとに作られるとされる。そこで本節ではまず「目」を表す形式の語根を求めていく。Fortson 2004 など先行研究では当該の語根を *h_3ek^w-と再建しているが，果たしてそれらが正しいのか，同源語のデータから再確認する。表 5 は Pokorny 1959 : 775 に基づく「目」を表す形式の同源語である。

表5　「目」 同源語

Ved.　ákṣi-/ akṣáṇ-「目」; 合成語　ákṣi-gola-「眼球」, an-ákṣ-「盲目の」
Ave.　ašai (du.)「目」
Arm.　akn / akan (G.)「目」
Gk.　*ὄσσε*「両目 (dual)」; *ὄσσομαι*「見る」;
　　アッティカ方言*ὀττεύομαι*「予想する」; *ὄφομαι* 'I will see'[7]
Alb.　sü, sy「目」
Lat.　oculus「目」
Gmc.　*a3w-「目」
Lith.　akìs「目」
Toch. A　ak (sg.) / aśäm[8] (du.)「目」
Toch. B　ek (sg.) / eśane (du.)「目」
OCS　očes- (語幹) / oči (du.)「目」

印欧語比較言語学の枠組では語根の基本的な構造は *CeC-, *CReC-, *CeRC-であると言われているので，当該語根の構造を $C_1V_1C_2$ とすると，それぞれについて表5のデータから次のような音が再建される。

C_1 —— 各形式で語頭が母音始まりであることから，祖語に於ける初頭の子音は消失したことが予想される。印欧祖語に於いて存在し，各言語で消失した子音として，laryngeal (喉音) と呼ばれる一連の子音がある。laryngeal には $*h_1$, $*h_2$, $*h_3$ という三つの音が想定されるが，現時点ではこれらのうち一つに決定できない為，C_1=H とする。

V_1 —— 母音交替する為，*e 及び *o が現れるが，citation form としては *e をとる。しかし，Gk *ὄσσε*, Lat. oculus など，祖語の母音をよく保存する言語に於いて，語根母音に o が見られることから，印欧祖語の段階でも *o が現れる形を想定しておく必要がある。先述した laryngeal の内，$*h_2$, $*h_3$ には後続する *e をそれぞれ *a, *o へと変化させる働きがあるため (一方 *o に対しては通常この様な変化を及ぼさない)，C_1 と V_1 とを関係させて考えた場合，C_1V_1-は，$*h_1o$-, $*h_2o$-, $*h_3o$-, $*h_3e$-の四つの可能性が考えられる。$*h_1$, $*h_2$, $*h_3$ は母音 *o に対しては影響を与えない為，何れも *Ho-となり，一方 $*h_3e$-は $*h_3$ が *e を *o へと変化させる為，$*h_3o$-となるので，どの形式も語根母音に *o が現れることとなる。

C_2 —— Lith. akìs, Lat. oculus から *k あるいは $*k^w$。更に Gk *ὄφομαι* から C_2=$*k^w$ であると考えられる (PIE $*k^w$ > Gk. p /____ 非前舌母音)。

以上から，「目」を表す語根は $*h_1ok^w$-, $*h_2ok^w$-, $*h_3ek^w$-, $*h_3ok^w$-の何れかであると考え

7) Fortson 2004 : 353 から追加した。
8) PIE $*h_3ek^w$-ih_1 > *ok-ih_1 > Proto-Toch. *æś-ah_1- > Toch. A aśäm

られ，laryngeal の種類に関わらず，語根母音が *o になったと考えられるため，*Hok^{w}-と表すこともできる。

2 各言語の「目」を表す名詞の構造

語根を *Hok^{w}-として各言語の同源語を比較した場合，各言語で「目」を表す形式が全く同じ形で祖形から受け継がれたとは考えにくい。一方，それぞれの言語で全く別個の発展が起こったと考えるのも現実的ではない。考えられる可能性は，「目」を表す名詞が歴史時代以前に，以下に示すような3種の構造を持っていた，というものである。

R-E（語根名詞）――― Lith. akìs, Gk. *ὄσσε*, Alb. sü, sy, Toch. A ak

R-S-E ――――――― Ved. ákṣi-, OCS očes-, Ave. ašai, Arm. akn/ akan

R-S-E 或いは R-S_1-S_2-E と考えられるもの ――― Ved. akṣáṇ-

想定されるこれら3種の構造は，印欧祖語初期の段階で既に全てが存在したのではなく，時代が下るにつれて生み出されたものであろう[9]。また，語根名詞（R-E）から，R-S-E という構造に変遷し，語根名詞が消失したのではなく，語根名詞の構造を持つ形式に加えて，並存するような形で R-S-E の構造を持つ形式が生じたのではないかと考えられる。

以下の節ではそれぞれの構造について，印欧祖語から各言語への変化のプロセスについて考察する。

3 語根名詞

ギリシャ語の*ὄσσε*，リトアニア語の akìs，古教会スラブ語 oči などの形式を見ると，これらは語幹形成接辞を伴わず，語根に語尾が直接つく所謂語根名詞である可能性が高いと考えられる。そこで，これらの「目」を表す語が印欧祖語の段階では語根名詞であり，ギリシャ語やリトアニア語がその語根名詞をそのまま受け継いだと仮定し，当該語根名詞の祖形を求めていく。

語根名詞の構造には二通りの母音交替が想定されており，語根を R，語尾を E とすると次のようになる。

	強語幹	：	弱語幹
（1）	R(é)＋E(ゼロ)	：	R(ゼロ)＋E(é)
（2）	R(ó)＋E(ゼロ)	：	R(é)＋E(ゼロ)（括弧内は母音の階梯を示す）

9） 言語の分岐モデルに従って考えた場合，早い時期に分岐したトカラ語派やイタリック語派には接辞によって拡張された形が見られず語根名詞の形が保存されていることから，語根名詞の構造が最も古く，R-S-E の構造をもつものはトカラ語派やイタリック語派分岐後に生じたのではないかと考えられる。また，R-S_1-S_2-E という構造は Vedic にしか見られないことから，印欧祖語の後期の時代，あるいはインド内部で生じた可能性が高い。

語根についてはⅡ．1で *$h_1$ok^w-, *$h_2$ok^w-, *$h_3$ok^w-, *$h_3$ek^w-の何れかとしたので，母音交替の視点に立った場合，*h_1e/ok^w-, *h_2e/ok^w-, *h_3e/ok^w-の3つのケースを考えればよい。

a）*h_1e/ok^w-の場合

（1）では *$h_1$ék^w-E（ゼロ）：*h_1k^w-E(é) となり，強語幹の *h_1 は後続する母音 *e の音色に影響を与えないため，*e が保存され，弱語幹の *h_1 は，ギリシャ語で母音化し e で現れることになるので，実際の形式と母音が一致せず不適当である。次に（2）では *$h_1$ók^w-E（ゼロ）：*$h_1$ék^w-E(ゼロ) となるが，先述の様に *h_1 は隣接する母音の音色に影響を及ぼすことがないため，強語幹では母音 *o が，弱語幹では母音 *e がそのまま保持される。強語幹の母音については問題がないが，弱語幹の母音 *e は，ギリシャ語では e で現れることが予想され，実際の形式 *ὄσσε* と語根母音が一致しない。しかしながら，強語幹の形式が弱形にも広がったと考えるならば，つまり強語幹からの leveling が起こったとするならば，弱語幹の形も *$h_1$ók^w-となり，語根に *$h_1$ok^w-を建てることも可能である。

b）*h_2e/ok^w-の場合

（1）では，*h_2é-E(ゼロ)：*h_2-E(é) となり，強語幹の *h_2 は続く母音を *e ＞ *a と変化させ，弱語幹の *h_2 はギリシャ語では母音化して a に，他の語派では消失する。よって，*h_1e/ok^w-の場合と同様に各言語の「目」を表す形式を音韻規則によって導けない。また（2）の場合，*$h_2$ók^w-E(ゼロ)：*$h_2$ék^w-E(ゼロ) となり，弱語幹の語根母音 *e の音色が *h_2 の影響によって *-a-へ変化するので，これも実際の諸形式を正しく導けない。但し *h_2e/ok^w-についても *h_1e/ok^w-同様，強語幹からの leveling を想定すれば，これを語根とすることも可能である。

c）*h_3e/ok^w-の場合

（1）の場合，*$h_3$ék^w-E(ゼロ)：*h_3k^w-E(é) となるが，この弱語幹の形はリトアニア語や古教会スラブ語に於いて語頭の *h_3 が消失する為，*h_3k^w- ＞ *k-と，語頭に母音のない形が予想される。リトアニア語 akìs などの例から，この再建は実情に合わず，不適当である。しかしこの形も強語幹からの leveling が弱語幹に起こったとするならば可能である。一方（2）の母音交替では *$h_3$ók^w-E(ゼロ)：*$h_3$ék^w-E(ゼロ) となり，強語幹，弱語幹，どちらの母音も o となり，ギリシャ語やリトアニア語の形式を規則的に導くことができる。

各言語に於いて，語根名詞由来の「目」を表す形式に有力なアクセントの情報が残っておらず，これらのうち，どのパターンが実際の形であったのかを決定することは難しい。そこでここでは「目」を表す語根名詞について，leveling を必要としない *$h_3$ók^w-E(ゼロ)：*$h_3$ék^w-E(ゼロ) という母音交替をとったと考える。但し，別の見方（*$h_1$ok^w-, *$h_2$ok^w-等）をとったとしても，本稿の議論の根本的な部分には影響しない。

当該の語根名詞について上述のように *$h_3$ók^w-E(ゼロ)：*$h_3$ék^w-E(ゼロ) と再建すると，ギリシャ語，リトアニア語，古教会スラブ語の「目」を表す形式についてはそれぞれ次のような説明が与えられる。

ギリシャ語の「目」を表す形式*ὄσσε*（du. N.）については，強語幹 *$h_3$ók^w-に中性双数主格対格語尾 *-ih_1 がついた形，*$h_3$ók^w-ih_1 という祖形を建てることができる。PIE の *ih_1 はギリシャ語では通常 *h_1 が脱落し，代償延長によって ī となるが，語末に来た場合，*$h_3$ók^w-i̯h_1と分節され，*h_1 が成節的に扱われる。また語根初頭の *h_3 は消失し，語頭音は o となる。残る *-k^w-i̯h_1-の部分は ss という音になるので［Rix 1976: 160］，最終的に*ὄσσε* という実際の語形を導くことができる（*$h_3$ók^w-ih_1 > *$h_3$ok^w-i̯h_1 > *ok^w-ye > *ὄσσε*）。

リトアニア語の「目」を表す形式 akìs（sg. N.）については祖形として *$h_3$ók^w-s が再建される。*h_3ó > *o という変化の後，バルト語派では印欧祖語の *o と *a が a へ合流するという変化が起こったので，語頭は a となる。また *k^w はバルト・スラブ語派では k であらわれ，語尾の *s についてはそのまま s で現れる。リトアニア語の形式に見られる（k に後続する）ì については次のような説明が与えられる。印欧祖語からバルト祖語への変化には *m̥ > *im というものがあり，この変化によって i-語幹名詞の対格語尾 *-im と子音語幹の対格形 *-im（< PIE *m̥）が一致した。この結果，子音語幹名詞において本来の語幹＋-i-までが語幹と再解釈され，-i-がパラダイムの対格以外の格にも広がり，新たな i-語幹名詞が生じた。akìs の-ì-についてもこの説明があてはまる（*$h_3$ók^w-s > *ok-s > *ak-s → akìs）。

古教会スラブ語の「目」oči（du. N.）はギリシャ語の場合と同様，*$h_3$ók^w-ih_1 という祖形を再建できる。語頭の *h_3 は後続する母音に影響を与えることなく消失し，語頭には *o-が残る。PIE の *o はスラブ語派ではそのまま o であらわれるので，実際の形と一致する。続く *k^w は *k へと変化した後，第一口蓋化の規則（k, g, x > čž, š / __i̯ or front V）によってčとなる。語末の *ih_1 は *h_1 が消失し，代償延長により *i が *ī へと変化する。スラブ語派に於いて *ī は i へと変化するので oči となり，想定した祖形から音韻規則通りに実際の形が導ける[10]（*$h_3$ók^w-ih_1 > *ok-ī > oči）。

このように印欧祖語で「目」を表す語は，少なくとも語根名詞の形式が存在しており，その形がギリシャ語やリトアニア語等に直接受け継がれたと考えるのが妥当である。

4 語根＋接辞＋語尾の名詞

Vedic（あるいはサンスクリット）の ákṣi-，古教会スラブ語の očes-という語幹，アヴェスタの aši 等は祖語の語根名詞をそのまま受け継いだのではなく，s を含む派生接辞によって拡張された結果，s-語幹名詞として受け継がれたのではないかと考えられる。

語根が *$h_3$ók^w-であると考えると，Vedic では語根部は **ák-，古教会スラブ語では **ok-

10） 古教会スラブ語 双数主格 oči についてはこれで実際の形を導くことができるが，単数属格 očes-e などについてはこの説明が当てはまらない。この問題については次節で考察する。

という形が予想される。すると，残る部分は Vedic では *-s(i)-[11]，古教会スラブ語では *-es-である。そこで，可能性のひとつとして考えられるのが，*-(e)s-という派生接辞が語根名詞を拡張し，Vedic では zero grade の接辞（*-s-）がついた形を，古教会スラブ語では full grade の接辞（*-es-）がついた形を受け継いだのではないか，というものである。

この *-(e)s-という交替が観察される接辞の中で有力なものは，Nussbaum（1986 : 150）が挙げている印欧語の身体名詞に特徴的な *-(e)s-という派生接辞である。この接辞は身体部位を表す語根名詞などについて，s-語幹名詞を派生する。

Nussbaum 1986 : 150 はギリシャ語の *κέρας* 'horn'（< *k̑ér-h_2-s）及び Vedic śíras 'head'（< *k̑ṛ̥-h_2-os）に見られる *-(o)s-の考察に際して，この接辞の例をいくつか挙げている。

身体部位を表す名詞		s-派生形	
***h_3ĕk^w-**	Gk. du. *ὄσσε*, 'eye'	***ok^w-es-**[12]	OCS oko/ocese etc, Ved. ákṣi- 'eye'
***k^{w}ṛ̥p-**	Ved. kṛ̥p-, Ave. kəhrp 'body'	***kṛ̥p-es-**	Lat. corpus 'body'
***tu̯ek-**	Ved. tvác- 'skin'	***tu̯ek-es-**	AV. tvacas-yà 'on the skin'
***-kr-u-(h_2)**	Gk. *ἀντι-κρύ* 'face to face'	***ker-u̯-es**	OCS čarĕavo 'body'
***g^{w}elbh-u-(h_2)**	Gk. *δελφύς* 'womb'	***gl̥bh-u-s-**	Ave. gərəbuš- 'newborn animal'

上記のような変化が実際に起こったとすると，Ⅱ．3 で見た語根名詞から Vedic 双数主格 ákṣī や古教会スラブ語 oces-（語幹部）のような s-語幹名詞と見てとれる形は，それぞれ次のように派生したと考えられる。

Vedic の双数主格・対格形 ákṣī の場合，印欧祖語の子音語幹の中性主格・対格双数語尾は *-ih_1，語根はⅡ．3 から *$h_3$ok^w-とすると，語根の直後に当該の派生接辞 *-(e)s-がつくことによって，*$h_3$ok^w-(e)s-ih_1 という s-語幹名詞が派生される。ákṣī の場合，語根末部の k と ṣ の間に母音がないことから，派生接辞の母音階梯は恐らく zero grade である。語頭の *h_3o-は *o-へと変わり，印欧祖語の *o はインド・イランの段階で *e と共に *a に合流したので，Vedic では a-として受け継がれたと考えられる。印欧祖語の *k^w と *k はインド・イ

11）Vedic ákṣi-の-ṣ-はインド・イラン語派に於いて起こった *s > *ṣ / *r, *u, *k, *i __ という変化（所謂 ruki-rule）によって *k（< *k^w）の後ろの *s が反舌化したものであると考えられる為，ここで *s を再建している。

12）Nussbaum 1986 : 150 は Ave. aš(i)-について，**axš（i-）という形が uši-（du.）「耳」からの影響で作りかえられた可能性を示している。

ラン語派では *k へと合流したことが知られているので，語根末の $*k^w$ は k になり，更にこの k によって ruki-rule が直後の *-s-にかかり，ṣとなる。語尾については，$*-ih_1$ は $*h_1$ が母音の音色には影響を与えないが，脱落することによって代償延長を引き起こし，ī となる。このように，*-(e)s-という派生接辞と語尾から音韻規則通りに，Vedic 双数主格 ákṣī という実際の形が得られる（$*h_3ok^w-s-ih_1$ > *ok-s-ih_1 > ak-ṣ-ī）。

古教会スラブ語「目」の属格 očes-e については，Vedic の場合と同様に，語根 $*h_3ok^w-$ に派生接辞 *-(e)s-が付加された形 $*h_3ok^w-(e)s-E$ が想定される。接辞の母音階梯は očes-と e で現れていることから，full grade であったと考えられる。語根初頭部は $*h_3$ の脱落後，祖形の *o がそのまま o として表れ[13]，語根末の $*k^w$ は *k と合流して *k となる。接辞の短母音 *e はスラブ語派に於いて e で保存され，この前舌母音 e によって直前の語根末尾音 *k は口蓋化し，čとなる[14]。更に語幹末の *s も古教会スラブ語で s として現れるので，očes-という語幹となる（$*h_3ok^w-es-E$ > *ok-es-E > oč-es-E）。

このように，身体名詞に特徴的な派生接辞 *-(e)s-を想定することによって，各言語で見られる-s-のつく形に説明を与えることができる。しかしながら，ここで問題が生じる。古教会スラブ語の「目」を表す形式について，双数形主格については語根名詞とし，語幹については派生接辞 *-(e)s-によって拡張された形であるとしている点である。次節ではこの点について考察していく。

5 語根名詞と s-語幹が混在するパラダイム

前節まででは，古教会スラブ語の「目」を表す形式について，双数主格は印欧祖語の語根名詞を受け継いだものであると言う一方で，パラダイムの他の位置では派生接辞によって拡張された s-語幹名詞に由来するという説明を与えており，それぞれの起源が統一的でない。そこで本節では古教会スラブ語の「目」を表す形式についてもう少し詳しく見ていく。

古教会スラブ語の「目」を表す形式のパラダイムは表 6 のようなものである。

表 6 古教会スラブ語 oko（語幹 očes-）「目」

	sg.	du.	pl.
N.	oko	oči	očesa
A.	oko	oči	očesa
V.	oko	oči	očesa
G.	očese	očьju/očiju	očesu
L.	očese	očьju/očiju	očesьxь
D.	očesi	očima	očesьmь
I.	očesi	očima	očesy

13) 印欧祖語の *o と *a はスラブ語派では合流して o となる。

14) 語根名詞として扱った oči と同様，第一口蓋化規則による変化。

表7　古教会スラブ語 uxo（語幹 ušes-）

	sg.	du.	pl.
N.	uxo	uši	ušesa
A.	uxo	uši	ušesa
V.	uxo	uši	ušesa
G.	ušese	ušьju/ušiju	ušesa
L.	ušese	ušьju/ušiju	ušesьxь
D.	ušesi	ušima	ušesьmь
I.	ušesi	ušima	ušesy

表6を観察すると双数形には派生接辞 *-es-が付加されていない形がある，一方，主格対格呼格を除く単数形と複数形の全ての格には *-es-が付加されているように見える形が広がっている。Lunt（1974：64）は oko「目」と並んで uxo「耳」も同様の特別な双数形をもつとしている。表7は uxo「耳」のパラダイムである。

表7からわかるように，uxo「耳」のパラダイムも主格・対格・呼格を除く単数と複数では語幹 ušes-が見られる一方で，双数では-es-のない形が語幹になっている。そこでこの「耳」を表す形式についても，語根に注目してみる。

6　古教会スラブ語 uxo（語幹 ušes-）「耳」

Rix（1998：246）によれば，uxo などの「耳」を表す語根は *$h_2$eu̯s-と再建されており，同源語のデータからもこれは裏付けられる[15)]。興味深いことに，この「耳」を表す形式についても語根名詞ととれるものと，*-es-等何らかの接辞によって拡張されていると考えられるものとの両方が存在する。

例えば，アヴェスタ uši-，ラテン語 auris などは，その形から語根名詞であると考えられる一方，ギリシャ語アッティカ方言 *οὖς*（**οὖσος*）などは *-es-によって語根名詞から拡張された形であると考えられる。また，ゲルマン語 *aus**an**-やアルメニア語 **un**kn から，*-(e)n-によって拡張された形も存在していることがわかる。

それでは古教会スラブ語の場合はどうであるか，oko（語幹 očes-）「目」と同様，双数主格 uši と語幹 ušes-に焦点をあて，それぞれが祖形からどのような変化を経たかについてみていく。

まず双数主格 uši について，上述の語根 *$h_2$eu̯s-に双数主格語尾 *-ih_1 を付加し，*$h_2$eu̯s-ih_1 という祖形を想定する。この祖形から，uši は規則的に導くことができる（*$h_2$eu̯s-ih_1

15）Pokorny 1959：785 より，同源語として挙げられているものを抜粋する。
Ave. uši N. du.「耳」，I. du. uši-bhya, Arm. unkn「耳」(*us-on-ko-m)；kn は akn「目」からの影響，Gk. dor. *ὦς*「耳」(*ōus)；att. *οὖς*（**οὖσος*），Alb. veh m.「耳」(*ōus-, ōs-)，Lat. auris f.「耳」(*ausi-s)，OIr. āu, ō n.「耳」(*əusos-)，Goth. ausō n.「耳」(Gmc. *ausan-)，Lith. ausìs f.「耳」，OCS ucho, G. ušese「耳」。

> *aus-ī > *aux-ī > uši)。

一方，単数属格形 ušes-e については，語根は先ほどの双数主格 uši と同様 *$h_2$eu̯s-をたて，接辞には同じ身体名詞である očes-「目」に見られる *-es-と同じものが付加されていると考えてよさそうである。したがって，祖形は *$h_2$eu̯s-es-es となり，単数属格形 ušes-e が困難なく導かれる。

7 oko（語幹 očes-）「目」と uxo（語幹 ušes-）「耳」

oko（語幹 očes-）「目」と uxo（語幹 ušes-）「耳」の観察から，印欧祖語には語根名詞とその語根名詞を接辞によって（この場合は身体名詞に特徴的な接辞 *-(e)s-）拡張された名詞とがあり，各言語は基本的にどちらかの形を受け継いでいるが，場合によっては両方の形をひとつのパラダイム内にもっている，という可能性が考えられる。特に，「耳」や「目」のように対になっている身体部位の名詞で，よく使われると予想される双数にのみ，より古い形である語根名詞が残っていると考えるのは妥当であろう。

一つのパラダイム内に同じ語根由来の二つの形が混在するという説明を導入することにより，サンスクリットの akṣi-/akṣaṇ-についてもよりよい理解を引き出すことができる。次節ではまず，Vedic において，これまで見てきた語根＋接辞-(e)s-という構造を持つと考えられる語形について考える。

8 Vedic に於いて s-語幹名詞であると考えられる形式

Ⅱ．4 で見たように双数主格対格 akṣí「目」が語根＋接辞 *-(e)s-として拡張された s-語幹名詞とするならば，Vedic には双数主格対格 akṣí以外にも s-語幹名詞であると考えられる形式として，単数主格対格形 ákṣi，双数与格奪格形 akṣíbhyām がある。これらの s-語幹名詞と考えられる形式の祖形をⅡ．4 と同様の手法で建て，音韻規則によって導くと次のようになる[16]。

	祖形		音韻規則による予想形	記録されている形
sg. N. -A.	*$h_3$ók^w-s-ϕ	>	*áks > **ák	ákṣi
du. N. -A.	*$h_3$ók^w-s-ih 1	>	**ákṣī	akṣí
du. D. -Ab.	*$h_3$ék^w-s-É	>	**akṣbhyā́m	akṣíbhyām

上記から解るように，双数主格・対格の akṣī は問題なく実際の形式を導くことができる。しかし一方単数主格・対格 ákṣi や双数与格・奪格 akṣíbhyām については音韻規則どおりには導くことができない。特にパラダイムの中で最も基本的な形とも言える単数主格・対格

16) 語根部 *$h_3$ók^w-についてはⅡ．4 を参照。sg. N. -A. *áks > **ák と予想されるのは，サンスクリット及び Vedic に於いて，語末の二子音連続は許されないからである。

の形は，何らかの二次的な変化によって得られたと考えられる。単数主格・対格の語尾-i，更に双数主格・対格の語尾-ī に注目すると，Vedic では i-語幹中性名詞及び形容詞がこれと同じ語尾を持つ[17]。そこで，双数形 akṣí の語尾-ī が i-語幹中性名詞の双数主格・対格語尾-ī と一致することから類推が起こり，単数形 *ákṣ に i-語幹中性名詞の語尾-i が付加され，ákṣi という形となったという可能性が考えられる（例：súc-i（sg. N.-A.）：súc-ī（du. N.-A.）＝ákṣ-i：akṣ-í）。しかしながら，Vedic に於いて i-語幹中性名詞は非常に数が少ないため，類推変化の動機として問題がある[18]。そこで考えられるのは prop vowel という可能性である。上述したように，通常の音韻変化では akṣi-/akṣaṇ-の単数主格・対格形は **áks を経た後，語末の 2 子音連続を許さないサンスクリット内部の音韻規則により，**ák となるが，この形式では語幹が不完全な形となり，意味が明瞭でない。そこで語幹の形を保持する為に，サンスクリットの minimal vowel である i が語末に，prop vowel として添えられたと考えることでも，単数主格・対格 ákṣi の語尾について説明を与えることができる。どのようなプロセスで単数主格・対格形が-i を獲得したかについて，決定的な証拠はないが，何れにしても，単数主格・対格形 ákṣi は二次的に語尾-i を獲得し，語幹部分については，語根 *h_3ok^w-に接辞 *-(e)s-が付加された形式 *h_3ok^w-(e)s-に由来すると見て問題はない。

また，Nussbaum 1986: 204 ff. は，主格・対格を除く akṣi-/akṣaṇ-の双数形のパラダイムは，双数主格・対格形 akṣī が akṣ-ī と再解釈されたことにより，ī-語幹名詞のそれに再構成されたとしている。Ṛg-Veda に現れる双数与格・奪格形 akṣíbhyām についても，このような二次的な変化の結果であると考えられる。

以上のように，語根名詞 *h_3ok^w-E が印欧語の身体名詞に特徴的な *-(e)s-という接辞で派生され，特に Vedic では *h_3ok^w-s-E という接辞が zero grade の形で受け継がれたと考えると，特に語幹が-i で終るものについて説明を与えることができる。しかし Vedic のパラダイム中の n-語幹の形式についての問題が残る。そこで次節では Vedic 及び古典サンスクリットに於いて n-語幹として現れる形に焦点を当てる。

9　*-n-による拡張

akṣi-/akṣaṇ-は，表 1 に示したように，古典サンスクリットに於いては弱形が n-語幹である。一方Ṛg-Veda では，表 3 に示したように記録されている形式のうち単数属格 akṣṇás，複数主格 akṣā́ṇi，複数具格 akṣábḥis が n-語幹である。これまでみてきたように *h_3ok^w-(e)s-という語幹を受け継いだと考えた場合，この語幹と語尾の間に見られる-n-はどのよ

17）表 4 参照。súci- n.「輝く」の単数主格・対格形は súci，双数主格・対格形は súcī。

18）この点について 2007. 05. 22 京都大学印欧語ラウンドテーブルに於いて，Werner Knobl 氏と Brent Vine 氏よりご指摘を戴いた。

うな説明を与えればよいだろうか。

Vedic には「口」を表す形式にás-という形と āsán-という形，二つの形式がある。ás-は Ṛg-Veda に数種の活用しか現れないが，同じく Ṛg-Veda に現れる āsán-は，活用の種類も用例も多く[19]，後の時代にも使われている。この二種類の「口」は，その形が極めて類似していることから，同じ語根から生み出されたものとみなすことができ，更に āsán-は ās-から *-(e)n-あるいは *-(o)n-という接辞によって拡張された形であると考えられる。Nussbaum（1986：53）はこのように *-n-で拡張された形の例をいくつか挙げている。

	拡張のない形	*-n-で拡張されたと考えられる形
「口」	Lat. ōs, ōris, Ved. ás-	Ved. āsn-´
「骨」	Ved. ásthi-, Hitt. ḫastāi	Ved. asthán-
「耳」	Lat. auris, Lith. ausìs	Goth. auso（Gmc. *ausan-）
		Arm. unkn（*us-on-ko-m）
「目」	Gk. *ὄσσε*（du.），Lith. akìs	Arm. akn/akan（G.）

このように，印欧語には同じ語根由来の名詞を *-n-によって拡張したと考えられる形が幾つかある。

ここで問題の語幹 akṣaṇ-に立ち返ると，語幹 akṣaṇ-は上記の例と同じように *-n-によって拡張した形，それも語幹 *akṣ-（< *h_3ok^w-s-）を *-n-によって拡張した形であると見ることができる。

それでは拡張された n-語幹名詞はどのような変化を経て Vedic の形式へと至ったのであろうか。Vedic や古典サンスクリットの n-語幹を示す形を観察すると，語幹末について現れが an と n（或いは a < *n̥）の二種類，つまり母音交替をしていることに気づく。そこで語幹 akṣaṇ-の祖形を求める為にまず，この形式がどのような母音交替によって特徴付けられていたかを考える。*-(e)n-あるいは *-(o)n-という派生接辞のついた名詞の母音交替のパターンは次の5種が考えられる。

	母音交替のタイプ	強形	:	弱形
（1 a）	acrostatic type I	R(ó)＋S(ゼロ)＋E(ゼロ)	:	R(é)＋S(ゼロ)＋E(ゼロ)
（1 b）	acrostatic type II	R(ḗ)＋S(ゼロ)＋E(ゼロ)	:	R(é)＋S(ゼロ)＋E(ゼロ)
（2）	proterokinetic type	R(é)＋S(ゼロ)＋E(ゼロ)	:	R(ゼロ)＋S(é)＋E(ゼロ)
（3）	hysterokinetic type	R(ゼロ)＋S(é)＋E(ゼロ)	:	R(ゼロ)＋S(ゼロ)＋E(é)

19） Grassmann 1873：190 によれば，ās-について，an-ás「口を持たない」，s_uv-ás「良い口の」，ā-daghná「口まで届く」などの複合語に見られる他，独立した形式としては単数主格 āsás が1回，単数具格 āsā́が21回Ṛg-Veda で記録されている。一方の āsán-は，単数具格 āsnā́が1回，単数与格 āsné が1回，単数奪格 āsnás が3回，単数処格 āsáni が6回，同じく単数処格 āsán（endingless locative）が8回，複数具格 āsábhis が6回である。

（4）amphikinetic type　R(é)＋S(o)＋E(ゼロ)　：　R(ゼロ)＋S(ゼロ)＋E(é)

この問題を考える際，語幹 *akṣ-が *-n-によって拡張されたのは一体いつの時代であったのかということに注意を払う必要がある。そこで続くⅡ．9及び10では，*-n-による拡張が起こったと考えられる時代によって，異なる説明の可能性があることを示す。

10　*-n-による拡張が印欧祖語の時代に起こった場合

「目」を表す形式が *-n-によって拡張されていると考えられるのは，アルメニア語 akn/akan 及び Vedic akṣáṇ-の二つである。このことから，*-n-による拡張が，印欧祖語の方言段階において起こったという可能性が考えられる[20]。また Nussbaum（1986：53）は古期アイルランド語 asn(a) 'rib' や Vedic asth-n- 'bone'，更に「耳」を表す形式に見られる対応（ギリシャ語 *οὖατ*：アルメニア語 un（kn），ゲルマン語 ausan-）から，*-n-による拡張が少なくとも祖語の後期に起こり始めたのではないか，としている。そこで *-n-による拡張が，印欧祖語が分岐し始める前後に起こったと想定して，akṣáṇ-の祖形を探っていく。

語根部 R を $*h_3(e/o)k^ws$-とし，接辞 S には *-(e/o)n-，語尾 E には athematic ending を想定した場合，（1 a）～（4）の母音交替のうち，複数主格の akṣáṇi という形から，少なくとも強形に於いて接辞が zero grade となる母音交替は語幹 akṣáṇ-には当てはまらず，また弱形の akṣṇás や akṣábhis から弱形の接辞に full grade を持つ母音交替も除外できる[21]。よって，語幹 akṣáṇ-に想定されうる祖形の母音交替は hysterokinetic type か amphikinetic type ということになり，それぞれのタイプに語根，接辞及び語尾を当てはめると，次のようになる。

（5）hysterokinetic type（R(ゼロ)＋S(é)＋E(ゼロ)：R(ゼロ)＋S(ゼロ)＋E(é))[22]

強形	pl. N(-A)	$*h_3k^ws$-én-h_2	＞	**kṣáṇ	akṣáṇi	（記録形）
弱形	sg. Ab(-G)	$*h_3k^ws$-n-és	＞	**kṣṇás	akṣṇás	（記録形）
弱形[23]	pl. I	$*h_3k^ws$-ṇ̥-bhí(s)	＞	**kṣabhís	akṣábhis	（記録形）

複数具格に見られる成節的な鼻音 *ṇ̥ は，サンスクリットでは母音化して a となった。複数対格については印欧祖語の段階で *-én-h_2 ＞ *-ēn という変化が起こり，サンスクリット

20）残念ながらアヴェスタでは双数主格及び具格の二種類しか残っておらず，*-n-による拡張が起こったかどうか不明である。

21）athematic type の名詞の中性複数主格・対格語尾は *-h_2 であるので，接辞が zero grade の場合 *oksṇh_2 となり，-ān-という音が導けない。

また，弱形接辞が full grade の母音交替では，弱形に akṣán-という語幹が予想されるが，古典サンスクリットに於いても Vedic に於いても，印欧語の弱形の語幹がこのような形を示すことはない。

22）（5），（6），（7）では，予想される形と記録されている形との相違部分を解りやすくするために太字にしている。

23）印欧祖語では弱形だが，サンスクリットでは中形という扱いとなる。

では ān となる。

（6）amphikinetic type（R(é)＋S(o)＋E(ゼロ)：R(ゼロ)＋S(ゼロ)＋E(é)）

強形	pl. N(−A)	*$h_3$ékʷs−on−h_2	>	**ákṣā	akṣā́ṇi	（記録形）
弱形	sg. Ab(−G)	*h_3kʷs−n−és	>	**kṣṇás	akṣṇás	（記録形）
弱形	pl. I	*h_3kʷs−n̥−bhí(s)	>	**kṣabhís	akṣábhis	（記録形）

印欧祖語から Vedic にかけての変化で（5）と異なる点は，強形の語根が *$h_3$ekʷ− > ak−となる点，及び複数主格対格の語末の *n の消失である。複数主格対格の語末 *−on−h_2 は，*−h_2 の消失により母音 *o が代償延長を受けた結果，*−ōn という形が生じる。この *−ōn には（5）の *−ēn とは異なり，祖語の段階で更に *n が脱落するという変化が起こった[24]。よって語末は *−ō となり，サンスクリットでは−ā となる。

（5），（6）から分かるように，hysterokinetic type, amphikinetic type いずれを想定しても，語幹 akṣaṇ−の記録されている諸形式を直接導くことができない。hysterokinetic type の強形と弱形，amphikinetic type の弱形では，初頭の語根母音が失われてしまい，問題である。考えられる可能性としては，amphikinetic type の強形の語根の形が弱形へと広がったというものである。hysterokinetic type は語根の階梯はどちらもゼロなので，語根母音を得ることができない。amphikinetic type の母音交替に於いて強形の語根の形が弱形にも広がったと仮定した場合の変化は次のようである[25]。

（7）amphikinetic type（R(é)＋ S(o)＋ E(ゼロ)：R(ゼロ)＋ S(ゼロ)＋ E(é)）

強形	pl. N(−A)	*$h_3$ékʷs−on−h_2	>	**ákṣā		akṣā́ṇi	（記録形）
弱形	sg. Ab(−G)	*$h_3$ekʷs−n−és	>	akṣṇás	=	akṣṇás	（記録形）
弱形	pl. I	*$h_3$ekʷs−n̥−bhí(s)	>	**akṣábhis[26]		akṣábhis	（記録形）

（7）のような変化であれば，それぞれの形で語根母音が現れ，単数奪格（属格），複数具格は記録形と同じ形を導くことができる。よって，n−語幹名詞として拡張された akṣáṇ−は amphikinetic type の母音交替をしていた可能性が高い。

ここで複数主格対格の語末の−ni について触れておきたい。音韻規則から予想される複数主格対格形は **ákṣā であるが，実際に記録されている形は akṣā́ṇi である。この−ni については，他の中性名詞複数主格対格 nā́māṇi（語幹 nā́man−）などから，−V̄ni が中性複数の形としてより相応しいと再解釈され，−ni が付与されたと考えられる。このような変化は a−

24） Jasanoff 2002 : 32 は，*−ōn > *−ō が起こった例として，Ved. áśmā, Lat. homō, Lith. akmuõ などを挙げ，一方 *−ēn で *n の消失が起こらなかった根拠として Lat. liēnis ‘spleen’, OIr. menmae（ < *−mēn < *−men−s）‘mind’, OCS imę などを挙げている。

25） 但し，どの段階で強形が広がったかということについては，現在のところ明言することができない。

26） 一般に Vedic において i はアクセントの置かれない低い階梯の母音であった。そのことから，語尾の−bhís から直前の a にアクセントが移り，akṣábhis という形になったと考えられる。

語幹，i-語幹，u-語幹中性名詞の複数主格においてしばしば見られた。例えば athematic noun である *medhu-「蜂蜜」（Ved. mádhu-）の複数主格対格形は *medhu-h_2 となる。サンスクリットでは madhū で現れることが予想されるが，古典サンスクリットにおいて madhu-の複数主格対格形は madhūni であり，予想される形とは異なる。これは同じく中性名詞である nāman-の複数主格対格形 nām**āni** などの形から，恐らく当時の話者が-V̄ni という形式が中性主格対格らしい形であると感じた為，本来語末の長母音だけで十分に複数主格対格の特徴を備えていた madh**ū** に-ni を付加し，madh**ūni** という新しい中性複数主格対格形を生み出したからであると一般に考えられている。実際，Vedic には母音語幹中性複数主格-対格に-ā/-āni, -ī/īni, -ū/ūni と両方の活用が記録されている。語幹 akṣaṇ-の複数主格対格形 akṣāṇi についても，これと同様の付加がなされたと考えられる。

このように *-n-による拡張を，印欧祖語（の方言）の段階で起こったとするならば，akṣaṇ-の祖形は amphikinetic type の母音交替をしていた可能性が高いと考えられる。

akṣan-の祖形の母音交替を amphikinetic type とするならば，サンスクリットで実際現れている母音を問題なく導くことができる。また，中性名詞 nā́man-「名前」の複数主格対格などは amphikinetic type の特徴を示すことが知られており，akṣáṇ-の母音交替のモデルとなる形式も存在する。

しかしながら，複数主格対格 akṣā́ṇi のアクセントは接辞にアクセントが落ちる hysterokinetic type を示している。同様に *-n-によって拡張されていると考えられる ās-án「口」，sakth-ā́n-i「腿」，doṣ-áṇ-ī「前腕」なども皆，接辞部分にアクセントが落ちている。これについての確実な説明を与えることは難しいが，現在のところ挙げられる可能性としては，アクセントについて hysterokinetic type から影響を受けた，というものである。また，amphikinetic type の複数主格対格として予想される **akṣā が存在していないという問題も残る[27]。

11　*-n-による拡張がサンスクリット内部で起こった場合

*-n-による拡張は他の印欧語にくらべ，サンスクリットにおいて顕著に見られる[28]。そこで，この拡張がサンスクリット内部で起こった場合を考える。

サンスクリット内部でこの変化が起こった場合，インド・イラン語派に分岐した時点で，祖語の母音 *e, *a, *o の区別は消失しており，これまで見てきたような母音交替を想定することができない。それでは akṣáṇ-が示す，an/n のような母音交替はどこから来たのだろうか。

27）nāman-の中性複数主格対格には nāmāni とは別に，古い形である nāmā が残っている。

28）asthan-「骨」，āsan-「口」，doṣan-「前腕」，sakthan-「腿」等，他の言語に比べ例が多い。

表8 ákṣi-/akṣáṇ- n「目」 nā́man- n「名前」

	sg.	du.	pl.	sg.	du.	pl.
N.-A.	ákṣi	akṣī́	akṣā́ṇi	nā́ma	nā́manī	nā́mani/-ā/a
I.	——	——	akṣábḥis	nā́manā	nā́mabhyām	nā́mabhis
D.	——	——	——	nā́mane	nā́mabhyām	nā́mabhyas
Ab.	akṣṇás	akṣī́bhyām	——	nā́manas	nā́mabhyām	nā́mabhyas
G.	——	——	——	nā́manas	nā́manos	nā́manām
L.	——	——	——	nā́mani/-an	nā́manos	nā́masu

Nussbaum 1986: 161 は印欧祖語本来の異語幹名詞である r/n-語幹からの影響を示唆しているが，身体名詞にはこのような r/n-語幹は少なく，動機として疑わしい。

最も簡潔な考え方は Vedic の他の n-語幹中性名詞からの影響を受けたとするものである。比較の為，再び ákṣi-/akṣáṇ-と n-語幹中性名詞の代表 nā́man-のパラダイムを掲載する。

表8から akṣáṇ-の母音交替は，nā́man-の母音交替と同じ分布を示すことが分かる。単数属格では-n-で現れ，複数主格では ān で現れている。

よって，サンスクリット内部で *-n-による拡張を受けた場合，拡張された語幹 akṣaṇ-は，n-語幹中性名詞のパラダイムの影響を受け，n-語幹中性名詞と同一の母音交替を獲得したと考えることが可能である。

しかしながら，アクセントに注目すると，nā́man-は全て語根部にアクセントが落ちているのに対し，複数主格対格 akṣā́ṇi は接辞に，単数属格 akṣṇás では語尾にアクセントが落ちている。このようなアクセントの移動は hysterokinetic type の母音交替からの影響が考えられるが，具体的にどのようなプロセスを経て ákṣi-/akṣáṇ-がこのようなアクセントを得たかについては，現段階では明確な説明が困難である。

12 分析のまとめ

以上のように，Vedic において akṣáṇ-という n-語幹をもとに活用する形式は，語根名詞から *-(e)s-という身体名詞に特徴的な派生接辞によって拡張された形 *akṣ- （< *h_3ok^w-s-）を，更に *-(e)n-（或いは *-(o)n-）によって拡張した構造 *h_3ok^w-s-(e)n-E（或いは *h_3ok^w-s-(o)n-E）という形に由来したであろうことがわかった。しかしながら，この *-n-による拡張がどの時代に起こったか，ということに関しては二つの可能性が存在する。

一つは，印欧祖語の後期，或いは分岐後に起こったというものである。この場合，akṣáṇ-の祖形の母音交替は amphikinetic type の可能性が高いが，アクセントについては hysterokinetic type の特徴を示し，hysterokinetic type からの影響が考えられる。

もう一つは *-n-による拡張が Vedic に多く見られることから，サンスクリット内部でこの変化が起こったという可能性である。この場合，akṣáṇ-が示す母音交替は，n-語幹中性名詞の母音交替と同様のものであるので，n-語幹中性名詞から影響によって特徴付けられ

たと考えることができる。しかしながら，インド語派内部で *-n-による拡張が起こったと考える場合も，単数属格 akṣṇás や複数主格対格 akṣā́ṇi のアクセントの問題が残る。

これら二つの可能性について，現時点でははっきりと決定することはできない。どちらの場合でも妥当な言語学的解釈を施すことが可能である一方で，いずれかを選ぶ決定的な理由がないからである。

13　s-語幹名詞と n-語幹名詞

Ⅱでは，「目」を表す形式が祖語から Vedic へと受け継がれる際，どの様な変化を経てきたかを見てきた。まず，幾つかの言語では，「目」は語根名詞 *h_3ok^w-E として受け継がれたが，古教会スラブ語（の双数形）などでは，*-(e)s-という身体名詞にしばしば見られる派生接辞によって拡張され，s-語幹名詞として残った例もあった。Vedic の単数主格対格 ákṣi や双数主格対格 akṣī́などはこの s-語幹名詞の形であると考えられる。また更に，「目」は派生接辞 *-(o)n-によっても拡張されていた。Arm. akn / akan（G.）などがその例である。Vedic はこの *-(o)n-という派生接辞を，既に *-(e)s-よって派生された形 *h_3ok^w-s-に付加し，n-語幹名詞の形を得た。

Vedic の「目」を表す形式 ákṣi-/akṣáṇ-は，語根名詞と s-語幹名詞を同一のパラダイムに存在させている古教会スラブ語 oko（očes-）のように，s-語幹名詞と n-語幹名詞とを同一のパラダイムに存在させていたと考えられる。また「目」は特に双数で使われる機会の多い身体名詞であるため，より古い形である s-語幹名詞が双数によく保存されたとも考えることができる。

続くⅢでは，印欧祖語から Vedic への変化を踏まえて，Vedic から古典期にかけての変化をみていく。

Ⅲ　Vedic から古典サンスクリットへの変化

1　Ṛg-Veda と古典サンスクリット

Ṛg-Veda と古典サンスクリットの形式を比較した際の違いは以下の通りであった。

	Vedic	:	古典サンスクリット
du. N-A.	akṣī́	:	akṣiṇī
du. Ab.	akṣī́bhyām	:	akṣibhyām
pl. N-A.	akṣā́ṇi	:	akṣīṇi
pl. I.	akṣábḥis	:	akṣibhis

Vedic 双数主格対格形 akṣī́の語尾が古典期では-iṇī と変化しており，双数奪格 akṣī́bhyām については，古典期の akṣibhyām と母音 i の長さが異なる。また，複数主格対格 akṣā́ṇi 及び複数具格 akṣábḥis の ṣに後続する母音の音色も問題である。古典期では akṣīṇi

akṣibhis と i-語幹で現れるのに対して，これらはどちらも n-語幹（*ṇ > a）で現れている。

この問題を解決するにはṚg-Veda から古典期にかけて，akṣi-/akṣaṇ-のパラダイムがどのような変遷を辿ったのかを見る必要があるだろう。

2 サンスクリット文献の歴史

Ṛg-Veda から古典サンスクリットへの変遷を追うにあたり，サンスクリット文献の歴史を大まかに捉えておく必要がある。そこで本節では Mcdonell 1900 を参考に，サンスクリット文学史を概観する。尚，訳語は木村 1975 に従った。

サンスクリットの文献はまずヴェーダ期とサンスクリット期に大きく分類される。ヴェーダ期は B. C. 1500 ～B. C. 200 であると言われ，その前半は創造的な題材や詩的性格が強く，後半は神学的考察に重点がおかれている。また，後半期は散文が多いことも特徴である。続くサンスクリット期は B. C. 200 ～A. D. 1000，厳密な意味でのサンスクリット期であり，婆羅門文化がインド亜大陸南部へと拡大していった時代であった。しかしながら，イスラム教軍侵入によってサンスクリット期は終焉を迎える。

更に，前者のヴェーダ期は細かく，四ヴェーダ期，ブラーフマナ期，スートラ期という三つの時代に分けられる。

i ）四ヴェーダ期

所謂ヴェーダの時代であり，Ṛg-Veda，Sāma-Veda，Yajur-Veda，Atharva-Veda の四つのヴェーダが作られた。絶対年代を示す有力な資料は今のところ発見されておらず，相対的な新旧しか解っていない。それぞれの Veda については，まず，最古のṚg-Veda は 10 巻[29]からなり，その完成には恐らく数百年を要したであろうとみなされている。次に，Sāma-Veda はその殆どがṚg-Veda からとった stanza であり，ソーマ供儀の都合に合わせて順を配置したものである。Yajur-Veda はṚg-Veda から借用した歌に加えて，独自の散文を有している。Atharva-Veda はṚg-Veda とは全く異なる趣をもち，思考段階が非常に原始的で，呪法的性格が強いとされる。また，Ṛg-Veda よりも遙かに遅く作られたと考えられる。ヴェーダ期は恐らく B. C. 1500 ～ 800 頃と Mcdonell 1900 はみている。

尚，ヴェーダ期の文献の相対年代は一般的には次のようなものだとされる[30]。

29） 一般にṚg-Veda の 10 巻のうち，第 10 巻のみ確実に新しいものだとされている。特に先の 9 巻が完成してからできあがったものであるという。その根拠として Mcdonell 1900 : 43 は，随所に 1 ～ 8 巻に見られる特徴が表れており，編纂者が古い巻に精通していたことが伺える点，第 1 巻と sūkta の数が同じ点，母音縮約が一層頻繁に起こる点，r に対して l の使用数の増加，複数主格の語尾に於いて-āsas が用いられる例の減少等，様々な点を挙げている。

30） はじめに略号，続いて正式な名を掲載している。例えばリグ・ヴェーダであれば，一般的には ṚV と略し，正式にはṚg-Veda となる。また，各文献は下にいくほど時代の新しいものである。

ṚV　Ṛg-Veda：最古のヴェーダ

AV　Atharva-Veda：ŚS（Śaunaka-Saṃhitā）と PS（Paippalāda-Saṃhitā）の二つの写本がある。

VS　Vājasaneyi-Saṃhitā：White-Yajur と呼ばれ，Mādhyaṃdina（M）と Kāṇva（K）の二種の写本がある。

MS　Maitrāyaṇīya-Saṃhitā：Black-Yajur と呼ばれる四写本のうちの一つ。

KS　Kāṭhaka-Saṃhitā：同じく Black-Yajur と呼ばれる四写本のうちの一つ。

KpS　Kapiṣṭhala-Kāṭhaka-Saṃhitā：同じく Black-Yajur と呼ばれる四つの写本のうちの一つ。

TS　Taittirīya-Saṃhitā：上記三つの Black-Yajur よりも新しい起源を持つと考えられる写本。

ii）ブラーフマナ期

詩の創造ではなく，祭式の発達に力を注いだ時代。Brāhmaṇa，つまり「brahman（呪文）を扱う書」が出現し，これは神学書の体裁を呈した。また，文体は散文が用いられ，抽象的な内容となっている。四ヴェーダ期のものと同様，アクセントを持ち，時期は B. C. 800 ～ B. C. 500 頃である。

iii）スートラ期

ヴェーダ祭式を扱う一方で慣習法を論じてもいる簡潔な論書がこの時期台頭した。ブラーフマナ文献や散在する諸伝承で伝えられている祭式や慣習を圧縮して記憶するために文が非常に簡潔になっており，時期は B. C. 500 ～ 200 年。後にサンスクリットの文法として固定される āṣṭādhyāyī『八巻の書』の作者である Pāṇini はこの時期である紀元前 4 世紀の人物であると言われる。

上述のように，Pāṇini の出現がスートラ期であることから，Ṛg-Veda から古典サンスクリットの流れを知るには四ヴェーダ期及びブラーフマナ期に於いて ákṣi-/akṣáṇ-がどのような形をとっていたかを調べるのが有効である。

3　四ヴェーダ期及びブラーフマナ期の ákṣi-/akṣáṇ-の分布

次の表 9 は Bandhu 1976 及び Bandhu 1973 をもとに，文献毎の ákṣi-/akṣáṇ-の記録形式とその出現回数を調査し，文献の年代が古い順に示したものである。右にいくほど，時代の新しい文献である。尚，ブラーフマナ期の文献は一括して Brāhmaṇas として扱った。太字の形式は古典期の語形と一致するものである。

4　Vedic から古典期への変化

表 9 からは次のような事実が観察される。まず，それぞれの格によって時代は異なるものの，n-語幹形式の語幹末の母音 a を i へと置き換えた形式が，ある特定の時代から現れてく

表 9

	ṚV	ŚS (AV)	PS (AV)	M (VS)	K (VS)	MS	KS	KpS	TS	Brāhmaṇas
sg. N. A. V.	**ákṣi**[1]	**ákṣi**[3]	**ákṣi**[2]				**ákṣi**[2]		**ákṣi**[3]	**ákṣi**[14]
I.						**akṣṇā́**[1]				
G.	**akṣṇás**[1]		**akṣṇas**[1]	**akṣṇás**[1]	**akṣṇás**[1]	**akṣṇás**[1]	**akṣṇás**[1]	**akṣṇás**[1]	**akṣṇás**[2]	**akṣṇás**[8]
L.						akṣán[1]			**akṣáṇi**[1]	akṣán[10] **akṣáṇi**[1] **akṣṇi**[1] akṣiṇi[4]
du. N. A. V.	akṣí[6]	**ákṣiṇī**[2] akṣyàu[8]	akṣi[2] akśyau[14]			akṣyàu[1]	akṣyau[1]	akṣyau[1]		akṣi[1] **ákṣiṇī**[15] akṣyáu[1]
I. D. Ab.	akṣíbhyām[1]	akṣíbhyām[3]	akṣíbhyām[4] **akṣibhyām**[2]				akṣíbhyām[1]		akṣíbhyām[1]	akṣíbhyām[1] **akṣibhyām**[8]
G-L.		akṣyós[3] akṣṇós[1]	akṣyos[4]	akṣyòs[1]	akṣyòs[1]				akṣ¡yós[2]	akṣyós[4]
pl. N. A. V.	akṣā́ṇi[1]	**ákṣīṇi**[1]	akṣāṇi[1]							**ákṣīṇi**[1]
I.	akṣábhis[9]			akṣábhis[1]	akṣábhis[1]	akṣábhis[1]	akṣábhis[2] **akṣíbhis**[1]			akṣábhis[2]
L.										**akṣiṣu**[1]

る。一方単数主格対格形 akṣi や単数属格形 akṣṇas は一貫して，akṣi, akṣṇas という形である。

この事実から，i-語幹の広がりが歴史時代のなかで起こったと考えられる。時代が下るにつれて i-語幹ととれる形式が増加しており，古典期では n-語幹で現れる双数属格処格形にも i が広がっている（akṣyós 等）。この現象については，双数主格対格 akṣí 影響で i を二次的に獲得した単数主格対格 akṣi が起点となり，パラダイム内に i が広がったと考える以外に納得のいく説明は得られない。

この観察をもとに，Vedic から古典期への変化を考察する。Ⅲ. 1 で示したように，Vedic と古典期の違いは以下の 4 点であった。

		Vedic	:	Classical
①	双数奪格の母音の長さの違い――	akṣíbhyām	:	akṣ**i**bhyām
②	複数主格対格の語幹の違い――	akṣ**á**ṇi	:	akṣ**ī**ṇi
③	複数具格の語幹の違い――	akṣ**á**bhis	:	akṣ**i**bhis
④	双数主格の末尾の違い――	akṣí	:	akṣ**iṇī**

この 4 点について一つ一つ見ていく。

①についてはまず，Vedic の双数奪格 akṣíbhyām という形が，i-語幹名詞としては不規則な形である。単数主格対格形 ákṣi を基準に考えるならば，*-n-による拡張のない形は i-語幹中性名詞の活用を示すと考えられる。しかしながら，双数奪格形は akṣíbhyām と，まるで ī-語幹名詞のような活用をみせる。そこで考えられるのは双数主格対格 akṣí からの影響によって akṣíbhyām という形が生じたという可能性である。Nussbaum 1986: 204 は ákṣi-/akṣáṇ-の（主格・対格形以外の）双数について，双数主格対格 akṣí が，akṣ-í と，つ

まり dev-íあるいは vṛk-íと同じタイプの ī-語幹名詞と再解釈されたのではないかと述べている[31]。また Debrunner und Wackernagel 1975 : 303 にも，双数語尾が ī-語幹のものにとって変わられたとの指摘がある。しかしながら，devíや vṛkíのような ī-語幹名詞は女性名詞であり，中性名詞である akṣi-/akṣaṇ-とは機能的な面で違いがあり，この説明には疑問が残る。

現時点で，Vedic の双数奪格 akṣíbhyām の長母音 ī に対して，はっきりとした説明を与えることはできないが，古典サンスクリットの双数奪格形 akṣibhyām への変化については，上述したパラダイム内での i の広がりの影響が考えられる。双数主格対格の影響によって i-語幹名詞となった単数主格 akṣi が起点となり，双数奪格についても i-語幹中性名詞双数奪格形語尾-ibhyām という形が与えられたと見なすことができる。

一方，②と③に対しては妥当な説明を与えることができる。②の Vedic 複数主格対格 akṣā́ṇi から古典サンスクリット複数主格対格 akṣīṇi への変化，及び③の Vedic 複数具格 akṣā́bhis から古典サンスクリット複数具格 akṣibhis への変化はどちらも，単数主格対格 ákṣ-i の i の広がりによるものだと考えられる。この i の広がりは，語幹末部の母音 a にしか及ばなかった。歴史的には語幹末に a を持つ形も n をもつ形も，どちらも n-語幹であったが，共時的に見た場合に n-語幹であることが明示的でない a を持つ形のみが i の広がりを受けたのだと考えられる。

最後に④の akṣí と akṣiṇī であるが，これは中性名詞双数主格対格が受けた，Vedic から古典サンスクリットにかけての一般的な変化の一つである。例えば súci-の場合，複数主格対格が二次的に n を獲得し súcīni となったことで，双数にもこの n が広がり，súcinī という双数主格・対格が生まれた［Debrunner und Wackernagel 1975 : 3, 51]]。akṣí と akṣiṇī についても同様の変化が起こったと考えられる。

まとめ及び今後の課題

本稿ではサンスクリットの不規則な異語幹名詞 akṣi-/akṣaṇ-「目」について，より古いサンスクリットである Vedic と古典サンスクリットの違いに着目し，akṣi-/akṣaṇ-が何故このようなパラダイムを持つに至ったかを考察してきた。

akṣi-/akṣaṇ-の語根を *h_3ok^w-と再建し，ギリシャ語の*ὄσσε*，古教会スラブ語の očes-，Vedic の akṣáṇ-等の同源語から，印欧祖語の「目」を表す形式は単一の形式があったのではなく，語根名詞や，語根を身体名詞に特徴的な *-(e)s-という派生接辞によって拡張した s-語幹名詞が（少なくともより新しい時代には）恐らく並存していた可能性を示した。また，

31） 例えば devī-の双数奪格は devībhyām である。

更に接辞 *-n-によって拡張した n-語幹名詞も歴史時代以前から「目」を表す形式として存在していた可能性を示唆した。

このように「目」を表す古い形式がいくつもある中，ギリシャ語の*ὄσσε* やリトアニア語の akìs は語根名詞の形を受け継ぎ，古教会スラブ語の očes-という形は，s-語幹名詞の形を受け継いだと考えられる。そして，古教会スラブ語については古い形である語根名詞 oči と派生接辞によって拡張された s-語幹名詞 očes-という両方の形が一つのパラダイムに内在していることを示した。問題のサンスクリット akṣi-については，古教会スラブ語の očes-と同様，s-語幹名詞の形を受け継いだと考えられる。

一方，akṣaṇ-については，拡張された s-語幹を更に接辞 *-n-によって拡張した形であると分析した。しかしながら，*-n-によって拡張された時代については印欧祖語の新しい時代に起こった場合と，インド内部で起こった場合の二つの可能性があり，現時点ではどちらか明確に決定することはできないとした。

このような観点から，akṣi-/akṣaṇ-というパラダイムは上述した s-語幹名詞と n-語幹名詞が混在する形で成立したと考えられる。更に，Vedic から古典期にかけては，単数主格対格 ákṣi の i がパラダイムに広がり，古典サンスクリットの akṣi-/akṣaṇ-のパラダイムが成立したことを示した。

しかしながら，今後検討を進めなければならない課題もある。II．9，10 で示した *-n-による拡張が起こった時期や，複数主格対格の akṣā́ṇi というアクセントの位置についての説明である。更に，他の i-/n-異語幹名詞もこれと同等の説明が果たして当てはまるのかということも重要な課題である。Jamison 1987：68 は，Vedic の身体名詞の研究について，次のように述べている。

> "Indeed, given all these complications, it may not come as a surprise that the standard glosses of many Vedic body parts do not stand up under scrutiny, and that even some of their morphological peculiarities have been overlooked."

このように，Vedic の身体名詞には解明していかなければならない問題が多く残されており，今後はこのような観点から更なる研究を進めていきたい。

略号一覧

A.	=	accusative	Lith.	=	Lithuanian
Ab.	=	ablative	M	=	Mādhyaṃdina
Alb.	=	Albanian	MS	=	Maitrāyaṇīya-Saṃhitā
Arm.	=	Armenian	n.	=	neuter
att.	=	Attic	N.	=	nominative
AV	=	Atharva-Veda	OCS	=	Old Church Slavonic
Ave.	=	Avestan	OIr	=	Old Irish
D.	=	dative	PIE	=	Proto-Indo-European
du.	=	dual	pl.	=	plural
dor.	=	Doric	PS	=	Paippalāda-Saṃhitā
E	=	ending	R	=	root
G.	=	genitive	Ṛg	=	Ṛg-Veda
Gk.	=	Greek	S	=	suffix
Gmc.	=	Germanic	sg.	=	singular
Goth.	=	Gothic	Skt.	=	Sanskrit
H	=	h_1, h_2, h_3	ŚS	=	Śaunaka-Saṃhitā
I.	=	instrumental	Toch.	=	Tocharian
I-Ir.	=	Indo-Iranian	TS	=	Taittirīya-Saṃhitā
K	=	Kāṇva	V	=	vowel
KpS	=	Kapiṣṭhala-Kāṭhaka-Saṃhitā	V.	=	vocative
KS	=	Kāṭhaka-Saṃhitā	Ved.	=	Vedic
L.	=	locative	VS	=	Vājasaneyi-Saṃhitā
Lat.	=	Latin			

参考文献

Bandhu, Viṣva. (1973) *A Vedic word-Concordance: Being a universal vocabulary register of about 400 Vedic works, with complete textual reference and critical commentary bearing on phonology, accent, etymo-morphology, grammar, metre, and text-criticism.* vol. 2, pt. 1 Hoshiarpur: Visveshvaranand Vedic Research Institute.

Bandhu, Viṣva. (1976) *A Vedic word-Concordance: Being a universal vocabulary register of about 400 Vedic works, with complete textual reference and critical commentary bearing on phonology, accent, etymo-morphology, grammar, metre, and text-criticism* (second edition) vol. 1, pt. 1. Hoshiarpur: Visveshvaranand Vedic Research Institute.

Debrunner, Albert und Jacob Wackernagel. (1975 (= 1930)) *Altindische Grammatik Band III.*

Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht.

Fortson, Benjamin W. (2004) *Indo-European Language and Culture : an introduction.* Oxford : Blackwell.

Grassmann, Hermann. (1873) *Wörterbuch zum Rig-Veda.* : Brockhaus.

Jamison, Stephanie W. (1987) Linguistic and philological remarks on some Vedic body parts. In : *Studies in Memory of Warren Cowgill* (1929 - 1985). ed. by Calvert Watkins, 67 - 91. Berlin/ New York : Walter de Gruyter.

Jasanoff, Jay H. (2002) The nom. sg. of Germanic *n*- stems. In : *Verba et Litteræ : Explorations in Germanic Languages and German Literature : Essays in Honor of Albert L. Lloyd.* ed. by Alfred R. Wedel and Hans-Jörg Busch, 31 - 46. Newark, Delaware : Linguatext.

Lubotsky, Alexander. (1997) *A Ṛgvedic Word Concordance Part I.* New Haven, Connecticut : American Oriental Society.

Lunt, Horace G. (1974) *Old Church Slavonic Grammar.* The Hague/ Paris : Mouton.

Macdonell, Arthur Anthony. (1900) *A History of Sanskrit Literature.* London : William Heinemann (『マクドネル・サンスクリット文学史：古代インド宗教文献概説』木村俊彦 1975)

Mayrhofer, Manfred. (1986) *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen I. Band.* Heidelberg : Universitsverlag C. Winter

Nussbaum, Alen J. (1986) *Head and Horn in Indo-European* [*Untersuchungen zur indogermanischen Sprach- und Kulturwissenschaft* 2]. Berlin/New York : Walter de Gruyter. Pokorny, Julius. (1959) *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch.* Bern und Stuttgart : Francke.

Rix, Helmut. (1976) *Historische Grammatik des Griechischen : Laut- und Formenlehre.* Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Rix, Helmut. (1988) *Lexikon der Indogermanischen Verben ; die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen.* Wiesbaden : Reichert.

Whitney, William Dwight. 1896. *A Sanskrit Grammar, Including both the Classical Language, and the Older Dialects, of Veda and Brahmana.* Boston : Ginn.

辻直四郎 (1974)『サンスクリット文法』岩波書店

(京都大学大学院文学研究科)